

## 高齢者の頭部外傷～現状と予防法～

### Traumatic Brain Injury in the Aged : Analysis and Preventive Measures

前田 剛（日本大学医学部脳神経外科学系神経外科学分野・麻酔科学系麻酔科学分野 准教授／青森大学脳と健康科学研究センター 客員教授）

わが国の高齢者人口比率（全人口における65歳以上の割合）は、現在26%であり、国民4人に1人が65歳以上である。これが2025年には30%、2055年には40%に増加すると推計されている。高齢者人口の増加に伴い、高齢者頭部外傷も増加している。頭部外傷データバンク（JNTDB, 日本脳神経外傷学会）による重症頭部外傷の年齢別発生頻度は、1990年代の終わりに20歳代と60歳代の二峰性のピークを認めていたが、年々、若年者層のピークが減少し、高齢者のみの一峰性のピークに変化した。さらに近年では、そのピークがより高年齢層にシフトしている。直近のJNTDB 2015における予後予測では、年齢が最大の予後不良因子であり、受傷時年齢が1歳上がるごとに予後不良が増加した。また、高齢になればなるほど転倒・転落による受傷が増加していった。これらの結果は、年齢依存性である高齢者の脳組織の解剖学的・生理学的脆弱性に原因があると考えられ、また高齢者に多い抗血栓薬の内服も転倒不良の一因と考えられる。よって超高齢社会を迎えたわが国では、頭部外傷に対する予防への取り組みは喫緊の課題である。これらの報告から、転倒・転落を予防することが、高齢者頭部外傷の有効な予防法であると考え、高齢者頭部外傷の代表的疾患である慢性硬膜下血腫（CSDH）の現状を厚生労働省のレセプト情報・特定健診等情報データベースから解析した。加えて、日本老年医学会の「特に慎重な投与を要する薬物のリスト」に納められた“筋力低下・立ちくらみ”などを副作用に認める薬剤を中心にCSDHへの関与を検討した。CSDHの人口10万対人数は加齢とともに増加し、ピークは80～84歳、男性が67%であった。“筋力低下・立ちくらみ”などを副作用に認める薬剤ではCSDHの増加を認め、特に75歳以上のCSDHの約半数に催眠鎮静剤・抗不安剤の内服を認めた。CSDHは高齢者頭部外傷の代表的疾患であるため、その発生頻度は高齢者における頭部打撲の頻度を表現している。頭部打撲の頻度が高いと、その中で重症に至る頻度も当然高くなる。高齢者が多く内服している薬剤には、頭部打撲を増加させる薬剤が含まれていることをわれわれは認識しなければならない。本講演では、JNTDBや私共の研究の結果から、高齢者の頭部外傷の現状と予防法を解説する。



#### 略歴

平成 3（1991）年 日本大学医学部医学科 卒業  
平成 10（1998）年 日本大学大学院医学研究科脳神経外科学修了 博士（医学）  
米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）神経外科 リサーチフェロー  
平成 16（2004）年 日本大学 講師  
平成 23（2011）年 日本大学 准教授  
平成 25（2013）年 日本大学医学部附属板橋病院 麻酔科科長  
平成 29（2017）年 青森大学 客員教授  
令和 2（2020）年 日本大学病院 手術部長・麻酔科科長  
現在に至る